

エッセイ

池の水を抜いたら・・・

鎌倉にて

鈴木 美恵子

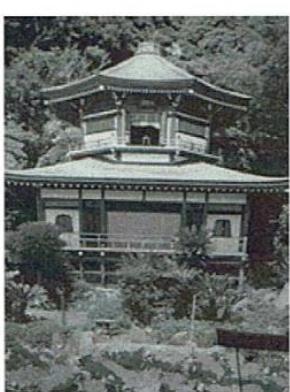
2016年の7月、友人に誘われて鎌倉光明寺、別名「蓮寺」の観蓮会に参加した。記主庭園の池に咲きほこるハスの花を楽しみに出かけた。そこには「大賀ハス」「キンズイレン」が池いっぱいに咲き、極楽浄土を連想させる蓮池のはずだった。しかし、大きなハスの花と蕾、受け皿の様に大きな葉があるのは池の3分の1ほどであった。

月日が過ぎ、翌年の2017年、何気なくテレビを見ていたら「緊急SOS! 池の水全部ぬく大作戦」という変わった番組をテレビ東京でやっていた。その中で、正月のスペシャル番組として鎌倉光明寺の池の水を抜く、と予告しているではないか!

何でも、池のハスが急激に減少して来ているので何か原因がないか調べて欲しい、とお寺の方から依頼があったと言う。激減した原因を調べて、元の様に綺麗な蓮池を取り戻したいと言う。私も興味

津津、何故少なくなってきたのか知らずにはいられない。

作業が敢行されたのはその年の12月、放送は翌2018年1月2日だつた。バラエティー芸人スタッフ、専門家、多くの小学生に加えお寺の僧侶も作業服に着替え賑やかに大々的に行われた。強力バキュームカーで、水やヘドロをどんどん吸い上げていく。参加者は皆、着衣も顔も髪の毛までも泥にまみれ、それでもワーウーイヤーイヤー、童心にかえつたかのように泥の中から魚を捕まえていく。やがて少しづつ池の底が現れてきた。



いたいた、居たではないか!! エビ、カニ、外来種のミシシッピアカミミガメを含む多くの力メ、いるはずのない80センチを超えるソウギヨ、10匹以上のウナギ、多数のメダカなど2600

匹以上が住み着いていた。特にソウギヨがハスの根などを食べ荒らし、可哀想にハスは生育できなくなっていた。何故、いるはずのない生物がこの池にいたのか?

カメの場合、縁日で売られてくるが大きくなると育てられなくなったり、池に放されることが考えられる。おそらくソウギヨもそういう事ではないだろうか。だがウナギは何処から入り込んだのだろうか、不思議である。

1日かけてヘドロと格闘し外来種を駆除、在来種を池に戻した。こういう「かいぼり作業」は昔から池の管理としてやつていた事である。だがメダカのような在来種は、いきなりそのままの水道水を入れては死んでしまう。それらがどうなったのか気掛かりではある。作業後、専門家によつてハスは植え直された。しかし、元々自然界に生存している生物にとつて、綺麗すぎる池はかえつて住みにくくは無かるうか。私には魚の気持ちは解らないが。

さて、鎌倉光明寺とは、鎌倉時代1243年創立の浄土宗大本山で山号を天照山、ご本尊は阿弥陀如来、開山は記主禪師、開基は鎌

倉幕府第四代執権北条経時と言わ
れている。

記主庭園の池に咲く「大賀ハス」
とは、1951年植物学者でハスの権威者でもある大賀一郎博士と、千葉市検見川の地元のボランティアの方々の協力によつて発掘され

たものである。

当時の花園中学校の一人の女生徒が、地下6メートルの泥炭層の土をザルで振るつて、地中に、一粒のハスの実を発見

した。そうこうして合計3粒の実が発掘され、大賀博士によつて発芽育成された。それは日本各地をはじめ世界各国へ根分けされ、「世界最古の花、生命の復活」と国内外でニュースになり、「大賀ハス」と命名されたのである。

蓮池観賞後、私たちは古代中国から伝わる「象鼻杯」という風流な楽しみを経験した。「象鼻杯」とは、ハスの葉の茎を途中で切り落とし、葉を杯代わりにしてお酒などを注ぎ、茎の中を通つて出てくるお酒を直接吸うようにして飲むものである。その後、大聖閣では抹茶席に参加し、二階ではご本尊である阿弥陀三尊像を拝観する事ができた。大聖閣からは、記主庭園や本堂などが一望の下に見渡

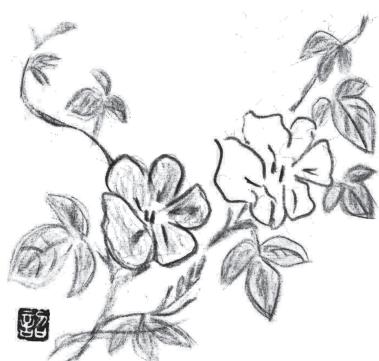
され、屋根の向こうには相模湾が静かに横たわり、それはそれは素晴らしい景色であった。

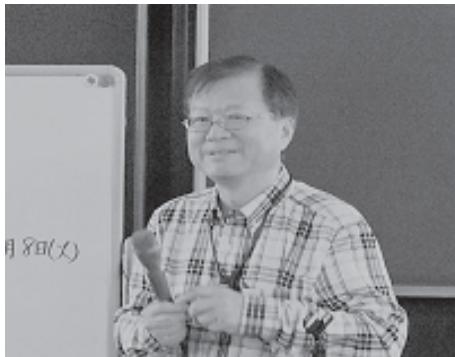
楽しかつた1日を過ごし、私達は2年後3年後の蓮池を思い描きながら、夏の鎌倉を後にした。

(終)

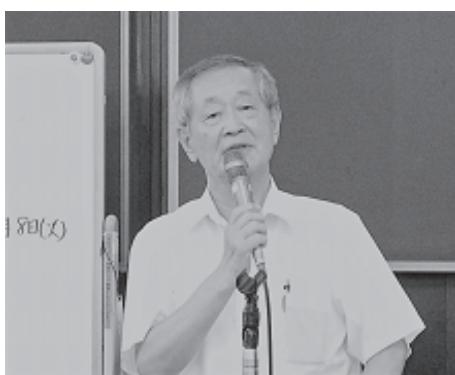
〔参考〕

テレビ東京
ウイキペディア
シティ千葉一大賀ハス何でも
情報館





発表中の竹内秀一さん



発表中の吉田友雅さん

▼発表者春口健二氏。題「神社研究－その六「古代の祈りと祭り」」会場・波止場会館。発表者3名。参加者九十九名。

以前の縄文・弥生および古墳時代の人々が自然災害にもめげずに子孫の繁栄を祈り、互いに励ましあつてきた祭りを考古学の資料から読み取り発表された。日本人の心の原点に迫るご講演であつた。

会員には信玄ファンも多く、活発な質疑応答が続いた。

▼発表者森岡 章氏。題「松陰日記を読む」（柳沢吉保伝）柳沢吉保は18歳で家禄530石の家督を継ぎ48歳の時には22万8千石の大老格となる。この異常な出世もあり世評は総じて芳しくないが、その悪評は後世の捏造であり、生類憐みの令と重ねて脚色された歌舞伎や俗書により柳沢侯臣説が流布された。側室正親町町子の日記から、将軍綱吉と吉保の関係、吉保の圧倒的な政治力と影響力を読み解かれた。

＊12月3日（月）十二月度例会。会場・波止場会館。発表者3名。参加者110名。

▼発表者西山達夫氏。題「田沼時代（後編）～美濃・郡上一揆の果斷な処理～」江戸中期は米本位制の政策が行き詰る時代になり、家重・家治治世になると田沼意次が登場し、米に変わる殖産産業を用いた重商主義で治めた。拝金主義

例会発表の概要

（平成二十年十月）
平成二十一年二月
＊10月1日（月）十月度例会。
会場・波止場会館。発表者3名。
参加者102名。

▼発表者竹内秀一氏。題「神奈川の古代直線官道について」近年、古代の道で幅が広く直線的な道路があり、全国に張り巡らされていたことが明らかになってきている。この直線官道が、いつ、誰によって、何のため造られたのか、未だ全貌は不明。古代直線官道を探索すると、国道246号と中原

街道がほぼ直線で平行して走り相模国府から常陸国府に至り、一部は現在の道路に継承されていることが地図で分かる。竹内氏は「古代道」は「歴史遺産」だと熱っぽく語られた。

▼発表者吉田友雅氏。題「武田信玄の大将として」

信玄は家康・

り特に家康は作戦・政治面で多く影響を受けたと言われる。「慈悲信長ともに恐れをなした人物である」事が肝要である「適材適所で人材を生かす」「正しき人物の見方」「賢将は五分の勝利を上とす」「人心の離反は一国の滅亡となる」等の視点から信玄の大將としての考え方を検証された。

＊11月5日（月）十一月度例会。
会場・波止場会館。発表者3名。
参加者九十九名。

▼発表者春口健二氏。題「神社研究－その六「古代の祈りと祭り」」

佛教と仏教建築が普及された時期

以前の縄文・弥生および古墳時代の人々が自然災害にもめげずに子孫の繁栄を祈り、互いに励まし

あつてきた祭りを考古学の資料から読み取り発表された。日本人の心の原点に迫るご講演であつた。

＊12月3日（月）十二月度例会。
会場・波止場会館。発表者3名。
参加者110名。

▼発表者西山達夫氏。題「田沼時代（後編）～美濃・郡上一揆の果斷な処理～」江戸中期は米本位制の政策が行き詰る時代になり、家重・家治治世になると田沼意次が登場し、米に変わる殖産産業を用いた重商主義で治めた。拝金主義

ととられる向きもある。西山氏は緻密な資料を作り、丹念にお話された。

▼発表者植木静山氏。題「日米

「幕末における日本の内政外交について」

の日本と列強の国々との関わりを詳細に解説された。幕府が當時どう対応したか、どうしてその対応がどうなったのか、その背景を理解するうえで重要な知識である。

ういう政策をとっていたかとの
ように対応を行つたかというよう
なことを述べられた。また安政の
大地震でロシアのディアナ号が難
破した際に、伊豆で国産の帆船を
建造し、500名の乗員を救つた
事件をいまの外交に映して興味深
くお話しされた。

*1月8日(火)平成31年定期
総会ほか開催(ホテル横浜ガーデン
にて) 13時より

▼第一部定期総会（出席者委任状含め171名中143名）。ご来賓は全国歴史研究会主幹・吉成勇様、江戸の歴史研究会会长・高橋倭子様。会長挨拶・吉成様ご挨拶

の後 159号議案を無事可決
第7号議案の人事異動案は、満場
一致で承認。名誉会長・加藤導男
(現会長) 会長・木村高久(現副
会長) 副会長・三觜行雄(現常任
理事) 新任理事・北村邦明、石井
昭徳、佐藤猛夫、雨宮美千代
事・宮下元(現理事) の各氏。

長による開会の言葉に始まり、ご来賓の高橋様にご祝賀を賜り、渡會顧問の乾杯で祝宴開始。アトラクションは岳精流日本吟院の北村雄山氏の詩吟。明治天皇の御製歌「あさみどり」、李白の漢詩「静夜思」をご披露いただいた。途中、当会の会歌を即興で吟じられるなど、普段接する機会の少ない詩吟の世界にすっかり魅了された。会員はカラオケタイムを経て全員で会歌斉唱し、無事終了。

横浜市開港記念会館。発表者3名。
会場
参加者92名。

広元と息子たち・一族の盛衰
鎌倉時代初頭に極めて重大な役割を果たした初代別当、大江広元は生まれも育ちも文官貴族であった。彼には7男4女がいたとされるが、息子たちはいずれも幕府に重用され、武士一族あるいは高級官僚一族に変貌してゆく。中世・近世へとつづく各嫡流家代々の歴史を綴

イザナキは九州の海で禊をし、アマテラスは孫を九州高千穂に降臨させた。神武天皇は瀬戸内海を溯り、奈良に国を開いたことになつてゐる。日本は全て九州から始まつたとされるが、疑問である。

「書記」は日本の古代史を記す「六国史」の最初を飾る書であり、國が作つたものである。國がこのような歴史を書いたのは何故かと、いう観点に立つて、蛭田氏は大麥に興味深い自説を熱弁された。

▼発表者堀江洋之氏。題「伝説に満ちた陰陽師（オンミヨウジ）阿倍清明の生涯」清明を祀る各所の神社は魔除け・厄除けの靈験のパワースポットとして人気を集めている。平安時代、都では疫病や飢饉が蔓延、人々は仏教や陰陽に救いを求めた。平安中期の陰陽師、阿倍清明は陰陽・暦術・天文術に精通し伝説的易占いの名人であつた。堀江氏は阿倍清明の生涯を、数多くのポスターを用いながら、誠に丁寧なご発表をされた。

られた。長尾氏は平安末期から墓
末まで至る大変長い話を見事に纏

▼第3部新年祝賀会「つなぐ」

廻する国の焦りをよく感じ取れる
ご発表であつた。

▼発表者蛭田喬樹氏 題「日本は九州出身?」日本書紀によると、

